

授業研究

## 専門スタッフ配置による学習効果とこれからの課題

高田昌裕、斎賀和彦

**【要旨】** メディア情報学部には、映像・音響関連の授業で使用されているメディア工房という演習室がある。専攻発展科目に属する演習に特化し、高度に複雑化した専門機材で構成されるこの演習室は、通常の教室同様の扱いでは運用が難しいため、2010年11月よりその教室に専門スタッフが常駐し、映像分野を中心にした運営補助と技術サポートを行ってきた。これまでの経験から現時点での成果をまとめる。同時に表面化してきた問題点と、今後の改善方法を検討する。

**【キーワード】** 映像・音響演習室 専門サポート要員

### 1. はじめに

メディア情報学部の中で特に映像、音響用の演習室として2009年にメディア工房が設置された。通常の教室と異なり、映像・音響関連の授業、特に専攻発展科目に属する各種演習のために使用を許可されている教室である。そのため、撮影、録音の専門機材およびグラフィック処理に長けたコンピュータと大規模なストレージシステム等が設置されている。学生がこの演習室の設備を使いこなすためには、特に映像分野においては専門的な知識、技術が必要とされる。機材、ソフトウェアの基本的な使用方法のみならず、実際の運用経験に基づく応用などは授業、ゼミ時間内のみで習得するのが難しく、またオペレーション教育が授業の目的ではないので、必然的に学生の多くは自主的に授業時間外に技術取得を目的としてメディア工房に集まってくる。

本稿は、質問や相談をすることができるスタッフとして2年間余り常駐し学生を支援してきた技術支援員の効果測定についての中間報告である。同時に今回実施したアンケート結果を検証し、そ

れをふまえての今後の業務の進め方を検討する。

### 2. 2012年12月実施のアンケート結果

2012年12月に実施したアンケート結果を集計する。このアンケートはメディア工房を使用する大久保博樹准教授、斎賀和彦教授、間島貞幸准教授にご協力を頂き実施した。対象は各ゼミの3年生、4年生の全員である。

回答者数は大久保ゼミ25名、斎賀ゼミ24名、間島ゼミ20名、計69名である。

問1では接点の有無、認知度を質問している。

接点があるという回答が52%、その中でも日常的に接点があると回答した学生の割合が33%であった。専門分野である映像系のゼミである間島、斎賀ゼミと、専門外の音響系のゼミである大久保ゼミを分け集計するとつぎのとおりである。

結果を、映像系のゼミに限ってみると接点ありの回答が75%、日常的に接点があるの回答が50%に大幅に上昇する。逆に、音響系ゼミである大久保ゼミに限ると、接点ありの回答が8%と極端に低下する。

表1 アンケート設問および回答数

Q1 スタッフと接点がありますか？									
質問内容	大久保ゼミ3年	大久保ゼミ4年	斎賀ゼミ3年	斎賀ゼミ4年	間島ゼミ3年	間島ゼミ4年	工房全体での割合	映像ゼミでの割合	
サポートや技術的指導に日常的に接点がある	1/12	0/13	10/13	8/11	2/10	2/10	33%	50%	
サポートや技術的指導にときどき接点がある	1/12	1/13	3/13	3/11	3/10	2/10	19%	25%	
存在は知っているがあまり接点はない	9/12	12/13	0/13	0/11	4/10	6/10	45%	22%	
そのようなスタッフの存在を知らない	1/12	0/13	0/13	0/11	1/10	0/10	3%	3%	

Q2 主にどのような接点がありますか？（複数回答）ただし、接点があると答えた生徒のみ回答									
質問内容	大久保ゼミ3年	大久保ゼミ4年	斎賀ゼミ3年	斎賀ゼミ4年	間島ゼミ3年	間島ゼミ4年	全体での割合	映像ゼミでの割合	
機材、ソフトウェアの基本的な使い方を教えてもらうなど	1	1	13	9	4	4	89%	91%	
機材、ソフトウェアの応用的な使い方を教えてもらうなど	0	1	10	9	2	4	72%	76%	
機材、ソフトウェアの故障、トラブル時のサポート	0	1	11	10	2	2	72%	76%	
機材管理、メンテナンス等の確認、調整	0	0	9	6	2	0	47%	47%	
就職活動や業界動向などの専門領域の相談	0	0	6	7	1	0	39%	39%	
友人関係や大学の事など一般的な相談	0	0	5	2	0	0	19%	19%	
その他									

Q3 このような専門領域の助手について									
質問内容	大久保ゼミ3年	大久保ゼミ4年	斎賀ゼミ3年	斎賀ゼミ4年	間島ゼミ3年	間島ゼミ4年	工房全体での割合	映像ゼミでの割合	
非常に有効。常駐してほしい。	5	3	12	10	3	4	54%	66%	
いまくらい（週2～3日）がちょうど良い	5	9	1	1	7	6	42%	34%	
教員がいれば、不自由はない	2	1	0	0	0	0	4%	0%	
( )分野のスタッフが欲しい	0	0	0	0	0	0			

Q4 専門助手に望むことは（複数回答）									
質問内容	大久保ゼミ3年	大久保ゼミ4年	斎賀ゼミ3年	斎賀ゼミ4年	間島ゼミ3年	間島ゼミ4年	工房全体での割合	映像ゼミでの割合	
機材、ソフトウェアの使い方に精通していること	5	2	12	8	5	7	57%	73%	
プロの現場のやり方を知っていること	2	5	12	3	4	1	39%	45%	
訊きたいときにすぐ相談できること	6	6	10	4	4	3	48%	48%	
就活の相談ができること	1	0	6	2	1	0	14%	20%	
兄貴分のようになんでも相談できること	1	2	5	4	2	0	23%	25%	
その他									

Q5 現在の映像、音響コースに足りないものは									
質問内容	大久保ゼミ3年	大久保ゼミ4年	斎賀ゼミ3年	斎賀ゼミ4年	間島ゼミ3年	間島ゼミ4年	工房全体での回答数	映像ゼミでの回答	
専門の教員	5	0	2	3	4	1	15		
専門の助手	1	1	3	3	4	1	13		
機材	1	1	7	6	2	1	18		
自由に使える演習室	7	8	7	2	1	8	33		

この結果から確認できるように、勤務中に接点がある学生は専門分野である映像系ゼミの学生に集中している。

授業、ゼミ中のTA業務等は原則として行っていないため、多くの学生との接点は授業時間外となり、結果として工房開放日である木曜午後に集中しているのが現状である。

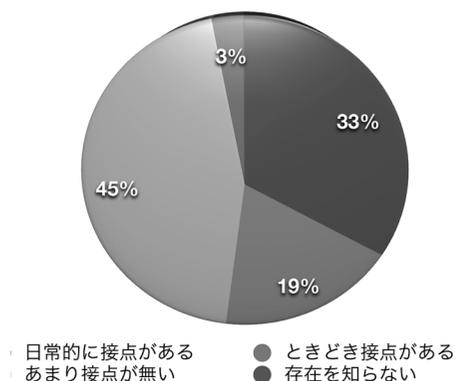
日常的に接点がある学生の割合が、接点があると答えた学生の67%にのぼることからも、接点がある学生の自主性が読み取れる。また、接点が非常に少ない大久保ゼミの学生であるが、ここからもいかに映像分野に偏倚しているかということが

わかる。

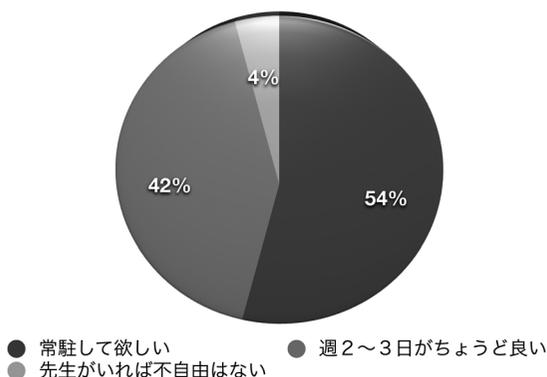
問2は、接点があると回答した学生に対する質問である。具体的な回答内容は、機材やソフトウェアの使用方法に関しての相談、トラブルやメンテナンスの相談、就職活動やそれ以外の一般的な質問などである。詳細な数字は表1により後述するが、複数回答が非常に目立つ。

複数回答になっているとはいえ、機材及びソフトウェアの使い方に関してはおよそ90%、サポートに関しても70%を超えている。それに比べ、就職活動や業界動向などの相談は40%を下回る。

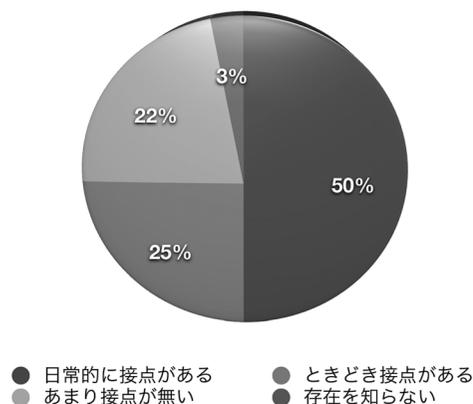
問1 スタッフと接点があるか（工房全体）



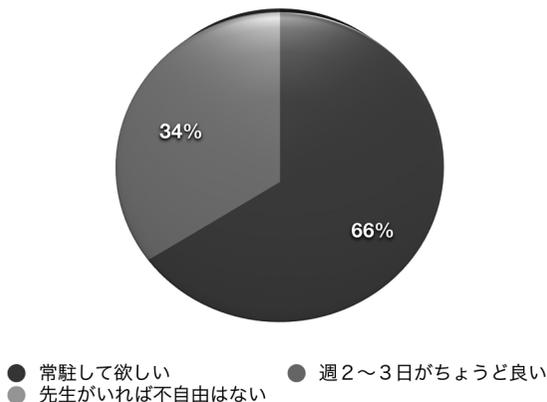
問3 専門助手について（工房全体）



問1 スタッフと接点があるか（映像ゼミ）



問3 専門助手について（映像ゼミ）



さらに一般的な相談などになると19%とかなり低い。この結果からも、工房所属の映像分野専門スタッフとして、非常にうまく機能していることが推測できる。

この間も複数回答になっており、回答内容はかなり分散している。「技術に精通していること」を回答した者の割合が高いのは当たり前だが、「訊きたい時にすぐに相談できること」を回答した割合も高い。

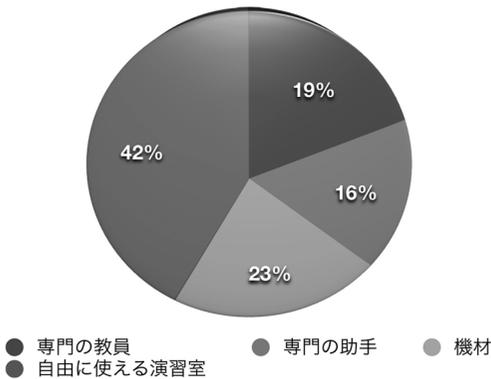
問3は勤務の頻度についての質問である。こちらも非常に明快な反応が返ってきており、ゼミごとに多少のばらつきはあるものの教員がいれば不自由はないと回答した生徒は3ゼミ総合しても3名のみであった。

最後の問5は現在足りないものに関する質問である。回答の多い順に並べると、自由に使える演習室、機材、専門教員、専門助手という順になる。映像制作をおこなうゼミナールに属す学生のうち、今年度の3年次生から、自主制作に挑戦する学生が増え、それに伴いメディア工房の使用頻度も高くなっている。その結果、Macの台数が不足する状態になるタイミングも少なからず出てきて

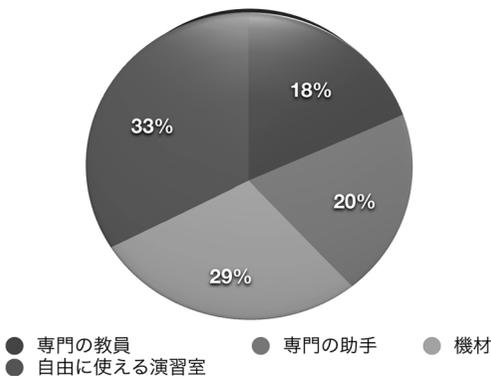
工房に常駐することが事実上不可能な教員に代わってのサポートの必要性が読み取れる。

問4はスタッフへの要望に関する質問である。

問5 現在足りないものは(工房全体)



問5 現在足りないものは(映像ゼミ)



いる。多くの機材に関しても同様である。さらに、工房を自由に使える時間が非常に限られており、映像制作に入ると現在の環境では完成までに十分な時間がかけられない状況になることも多い。

現状では、映像・音響関連の各ゼミに割り当てられている曜日は当該ゼミの優先日とされている。その他の曜日にも授業が設定されているために自由にメディア工房を使える時間帯は木曜日の午後のみである。

制作物のクオリティが非常に高くなってきており、それにともない作業時間が大幅に伸びていることも、足りないものの第一に「自由に使える演習室」が挙げられている原因のひとつと思われる。

る。

サポートスタッフが勤務しはじめたころは時間外に制作等を行う学生は非常に稀であったのに対して、最近の状況は専門スタッフを置いた成果の表れと言えるのではないだろうか。

現在のカリキュラムになって4年、作品クオリティが高くなるにつれ特殊効果などを使う学生が増えている。その際にインストールされたソフトウェアの使用方法が分からず活用できないという状況も発生している。それが使い方に関する授業が足りないという感じ方となり、専門教員が足りないという意見になっているようだ。

現在学生のサポートメインの日と、機器のメンテナンスや事務作業系などの日、必要に応じての追加日という週2~3日が基本的なペースとなっている。

各タイミングでスタッフとして相談にのっているが、質問が重なる事もしばしばあり、全員に対応できない事もあるのが現状である。

これらのことが、未だ専門助手も足りてないという回答結果に繋がっていると推測できる。

### 3. 今後の対応と課題

一日に受ける質問や相談の多くが機材やソフトウェアに関するものであり、その質問内容や相談内容も重なる部分が見受けられるのが現状である。

使用する頻度が高い機材やソフトウェアに関して特別講座等を設け、多数の学生の経験値を高めることで質問の数は減らすことができる筈である。のような講座を数回は開いているが授業や活動等の兼ね合いで、それほど参加者数は多くない。この点に関しては今後も開催方法や時間などを相談して改善していく予定である。

これと同時に進めなければならない作業として挙げられるのが常駐ではないためにスタッフが工

房にいない場合も多く、その際に学生が自発的に答えを見つけられる方法の確立である。

具体的な方法としては先に記述した報告書の内容のデータ化が第一に挙げられる。使用ソフトウェア、機材ともに毎年少しずつ変化している関係上、常に更新は必要であるが質問の中でも確実に出る基本的な質問に限って言えば、FileMaker等のソフトウェアを使用してインデックス化をはかることで学生の自主性及びスタッフの力をより効率的に使うことが可能になると思われる。既に現在学校で所有している一眼レフ用のレンズ群に関しては、情報の可視化は完了しており学生は自分の撮影内容や表現したい方法から自分でレンズを選ぶ事が可能になっている。

現在それ以外の情報インデックス化も始めているが、次のステップとしては各マシン上でそれらの情報の可視化を行い、基本的な問題が起こった

場合に検索から解決法を探し出せる状態に持って行く必要がある。

Macの使用上の問題なのか、ソフトウェア使用上の質問なのか、もしくは機材使用上の質問なのかと非常に多岐にわたるが、情報が増えていくにつれ有用性は非常に高くなるとされる。

これらに関して来年度以降も引き続き作業を継続して行く予定である。

本年度に関していえば、3年時に雑誌ビデオサロンとの連動企画で短編映画を制作した学生、同じく3年次から10ヶ月にわたり、日本経済新聞社及び経済産業省からの依頼で行った、社会人基礎力育成グランプリ映像プロジェクトでリーダーを務めた学生が、業界最大手であるポストプロダクションへの入社が決まるなど、今後は就職実績という面からも成果が出てくると期待している。

**Learning effect by placement specialists and challenges of the future.**

by TAKADA Masahiro, SAIKA Kazuhiko

**[Abstract]** In Faculty of media and information Resources, there is a classroom named "media kobo" that been used workshop related to video and audio. I've been doing that resides in the classroom support from November 2010, specializing in the video field. This time, I consider the solution of ongoing problem and summarize the results of our experience so far.

**[Key Words]** seminar room for video and audio  
specialized support staff